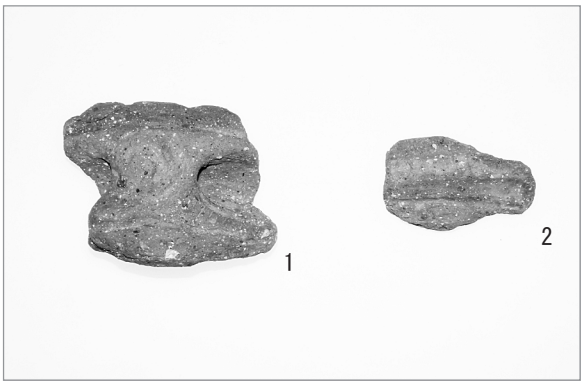
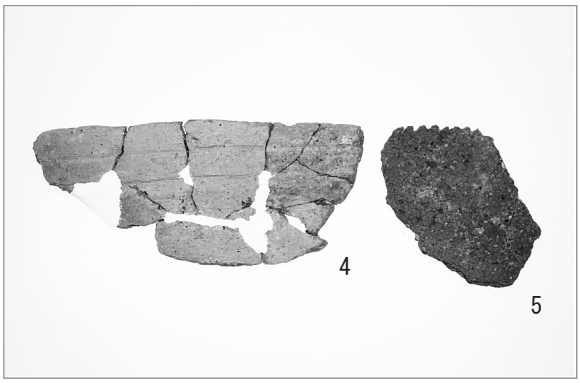
⑥区縄文時代遺物包含層（Ⅳｂ層）遺物出土状況

SR-27　遺物出土状況

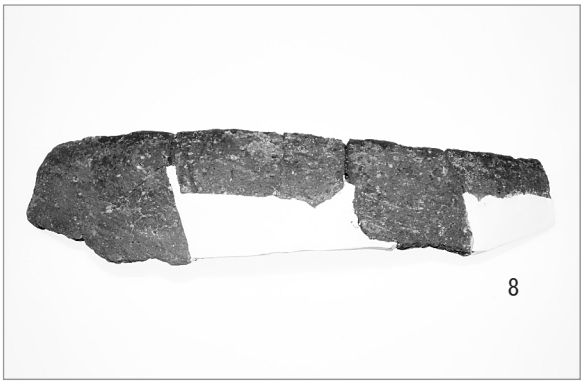
図版2　⑥区縄文時代遺物包含層・SR-27遺物出土状況



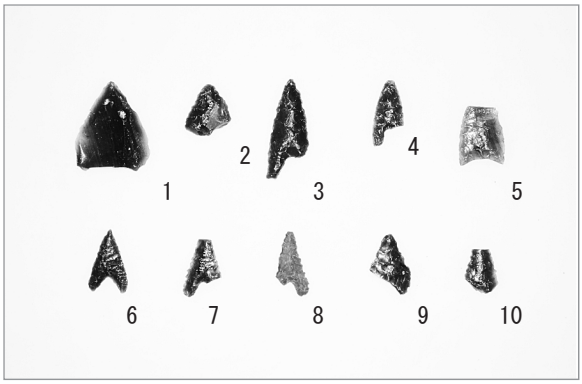

②区　出土土器(1)



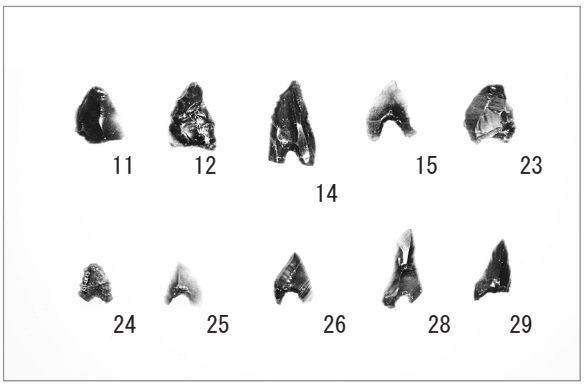

②区　出土土器(2)



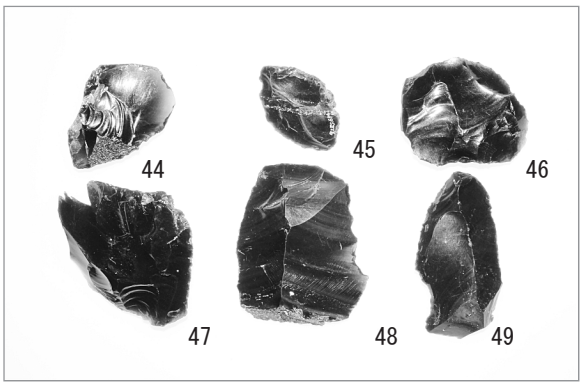

②区　出土土器(3)



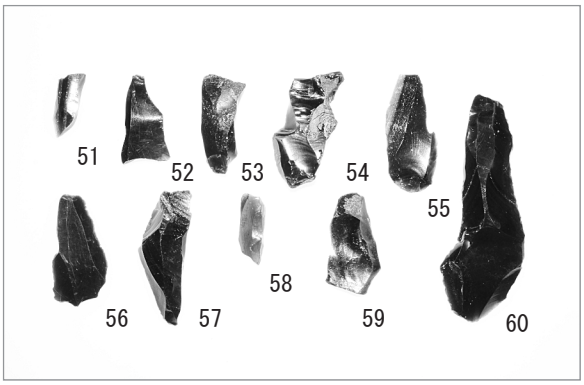

②区　出土石鏃



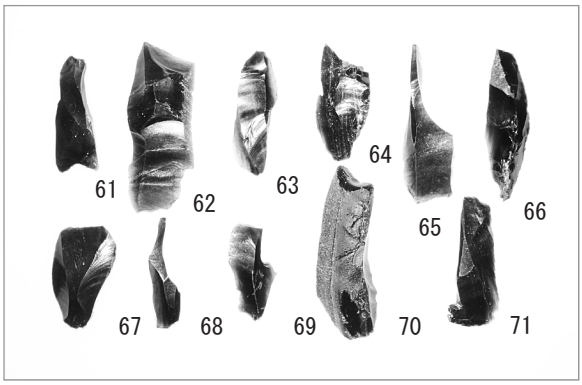

②区　出土剥片鏃




②区　出土スクレーパー

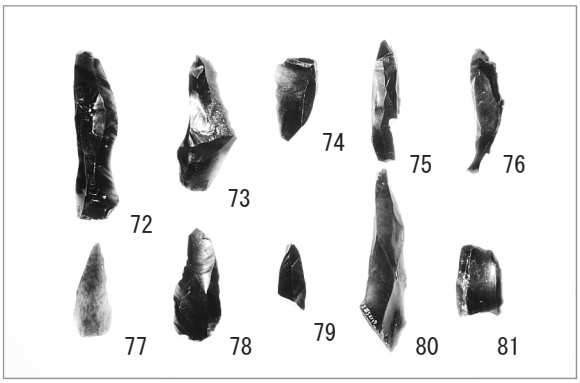



②区　出土彫器(1)

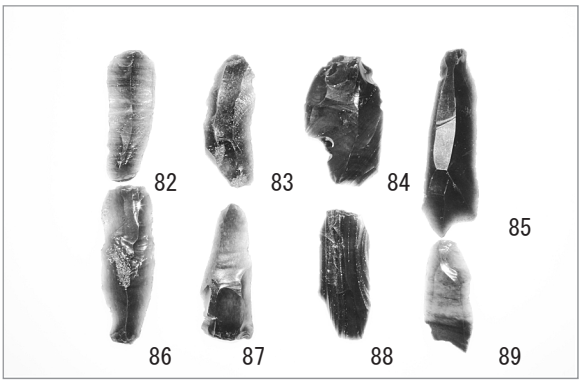



②区　出土彫器(2)

図版3　②区縄文時代遺物包含層出土遺物

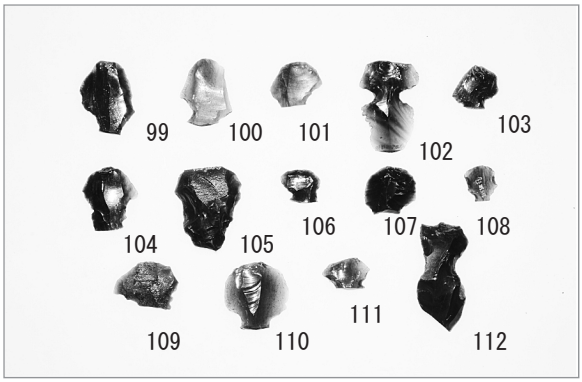



②区　出土彫器(3)




②区　出土鈴桶型石刃

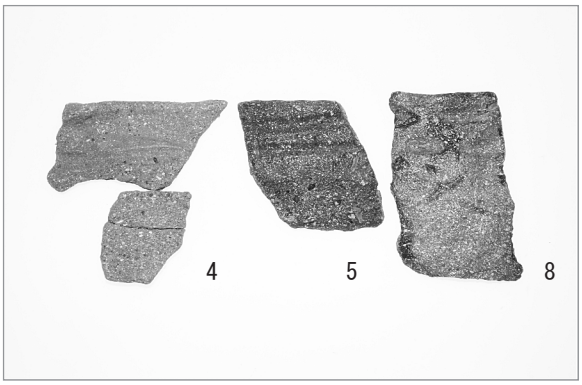
②区　出土石核



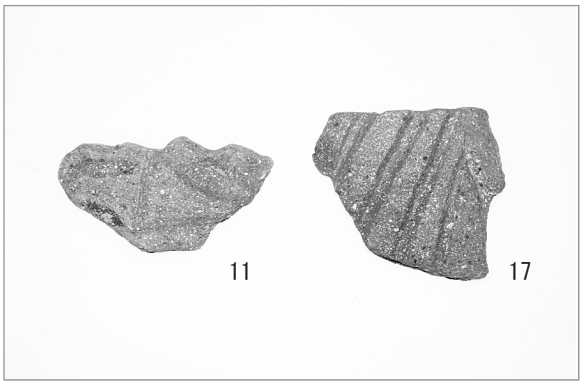

②区　出土石器

②区　出土敲石

⑥区　出土土器(1)

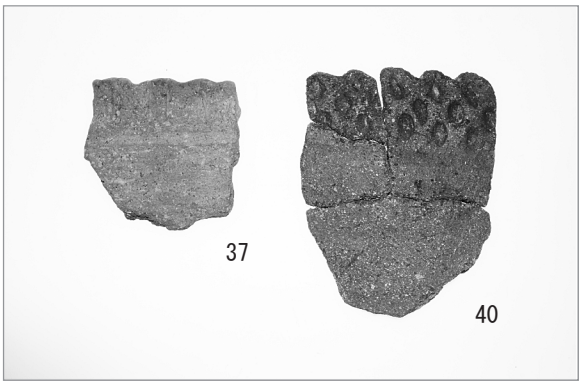



⑥区　出土土器(2)

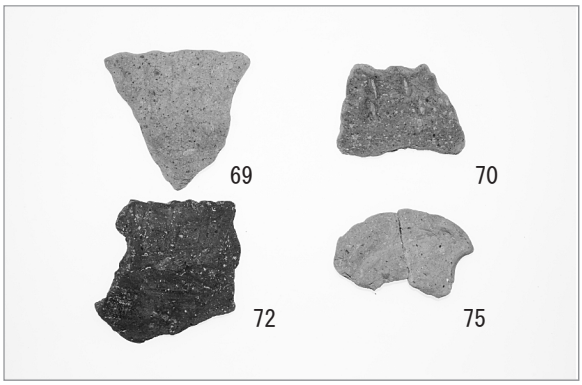



⑥区　出土土器(3)

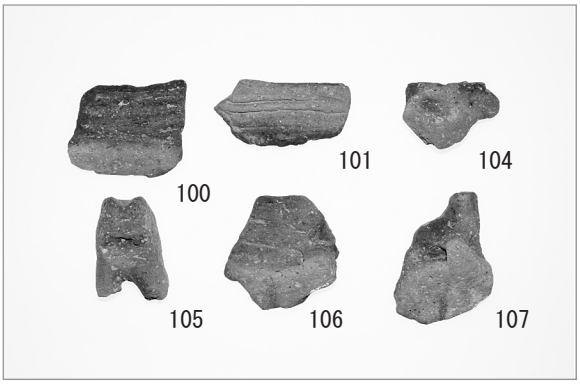
図版4　②区・⑥区縄文時代遺物包含層出土遺物



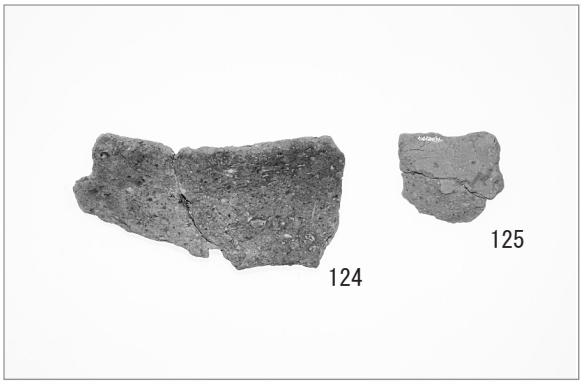

⑥区　出土土器(4)




⑥区　出土土器(5)

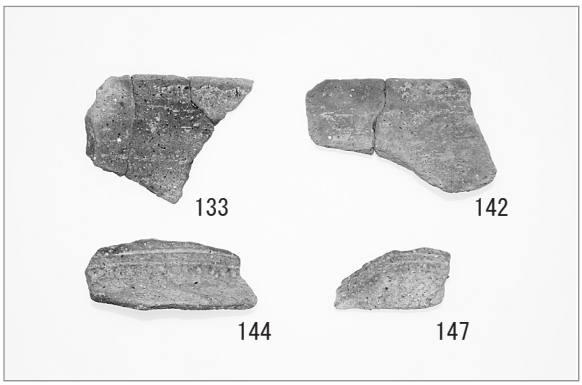



⑥区　出土土器(6)

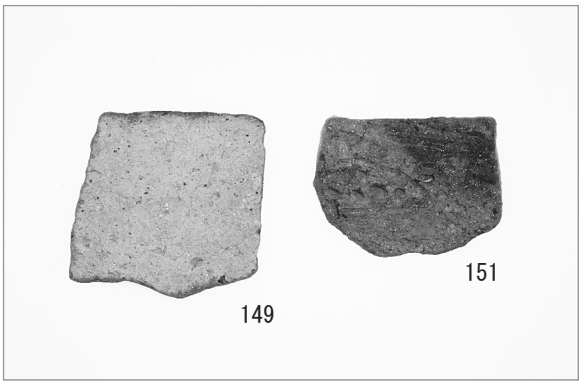



⑥区　出土土器(7)

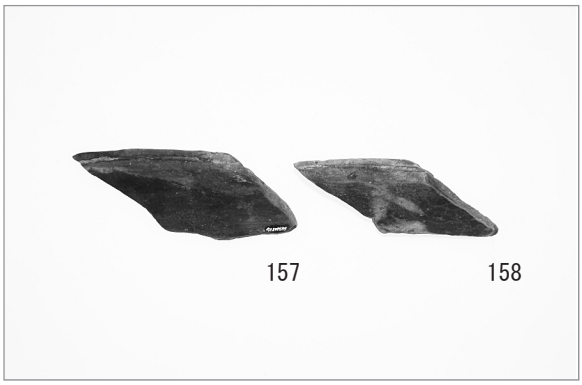
⑥区　出土土器(8)




⑥区　出土土器(9)



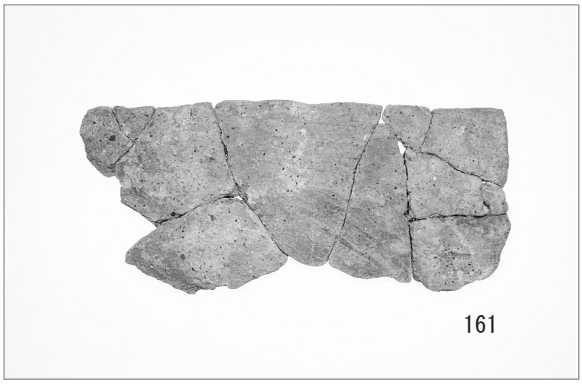

⑥区　出土土器(10)



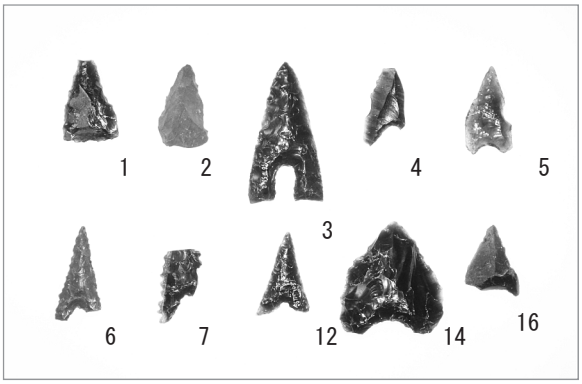

⑥区　出土土器(11)

図版5　⑥区縄文時代遺物包含層出土遺物（1）

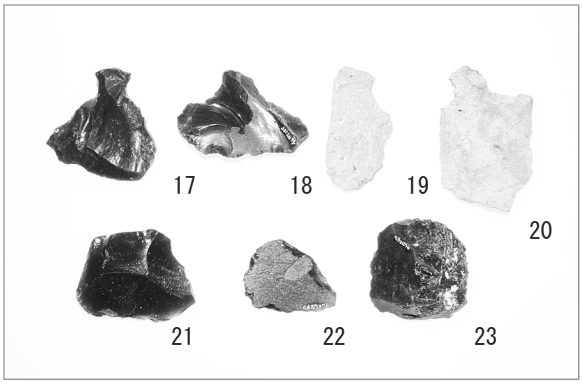
⑥区　出土土器(12)



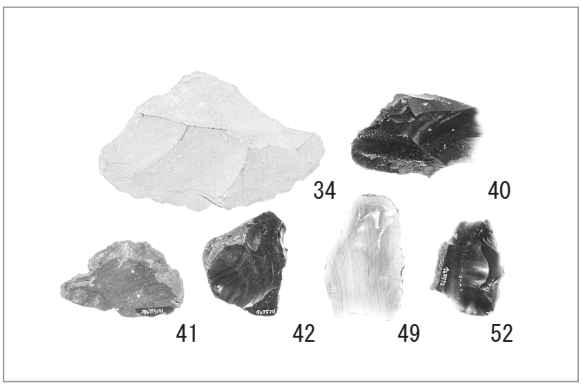

⑥区　出土土器(13)



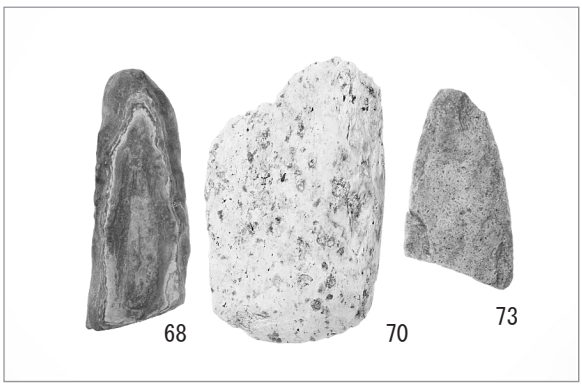

⑥区　出土石鏃



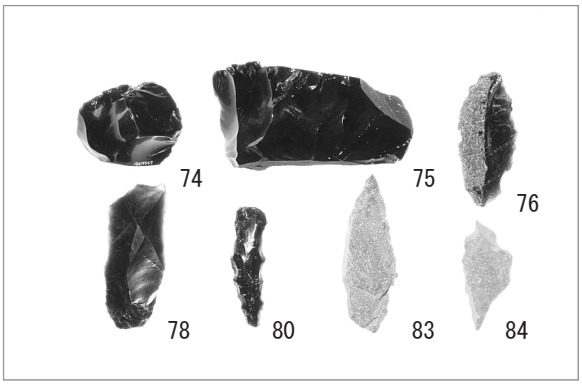

⑥区　出土石匙・スクレーパー




⑥区　出土スクレーパー



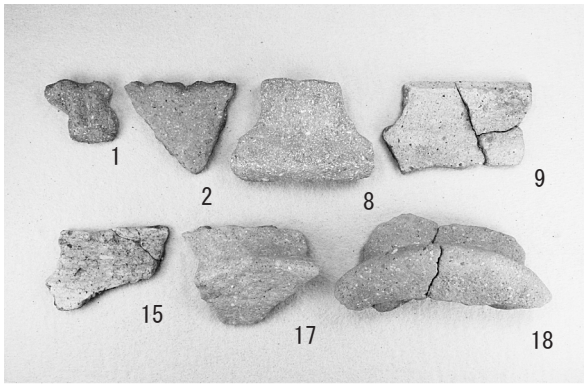

⑥区　出土磨製石斧・打製石斧



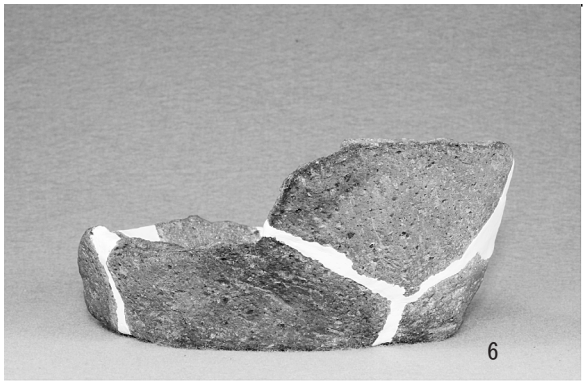

⑥区　出土石核・尖頭器・石槍

⑥区　出土砥石

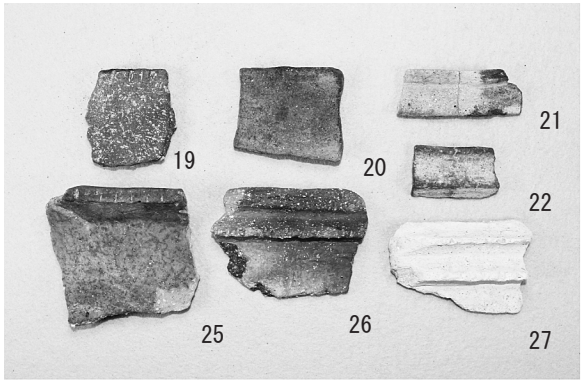
図版6　⑥区縄文時代遺物包含層出土遺物（2）



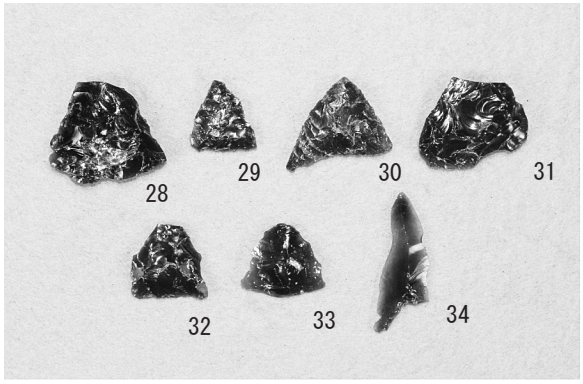

⑥区Ⅳａ層　出土土器(1)



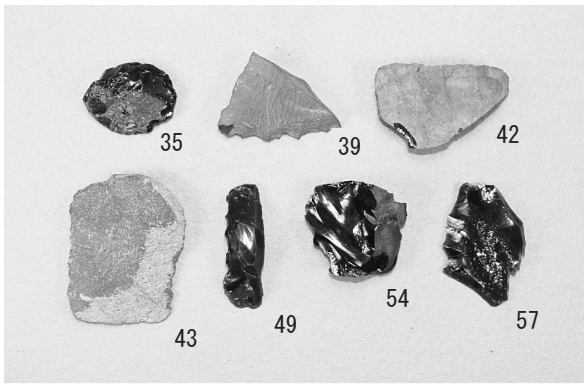

⑥区Ⅳａ層　出土土器(2)



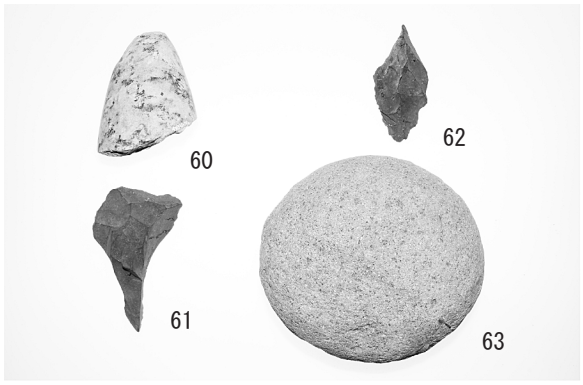

⑥区Ⅳａ層　出土土器(3)



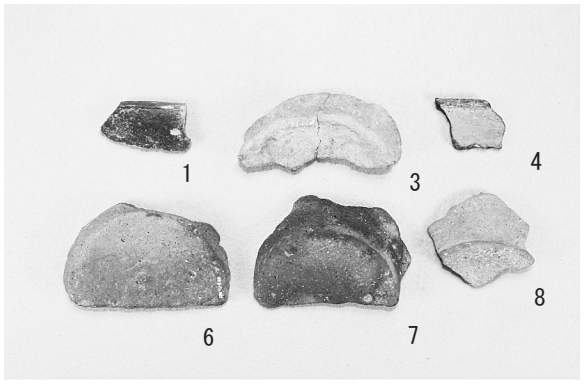

⑥区Ⅳａ層　出土石鏃・剥片鏃



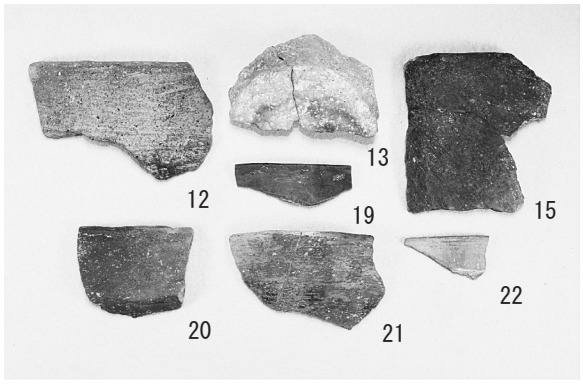

⑥区Ⅳａ層　出土スクレーパー




⑥区Ⅳａ層　その他出土石器

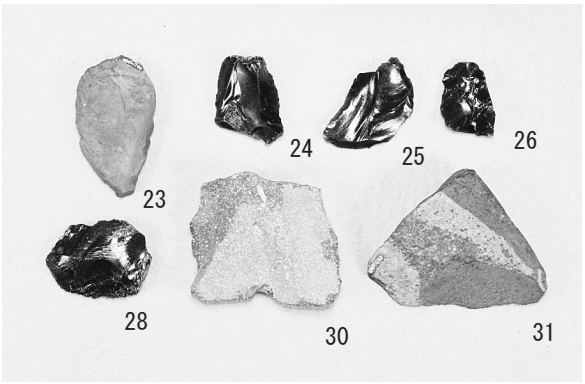



⑥区Ⅳｄ層　出土土器(1)

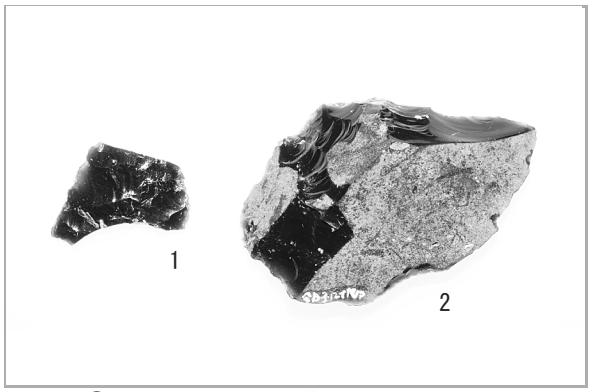



⑥区Ⅳｄ層　出土土器(2)

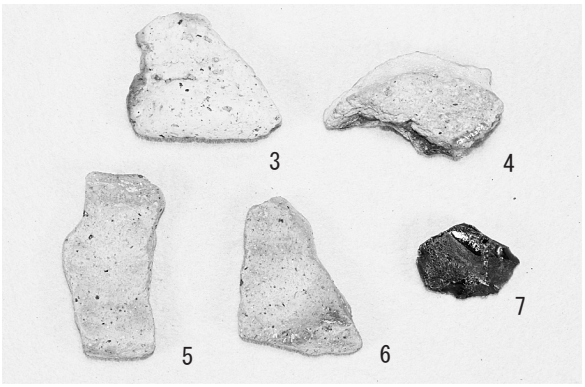
図版7　⑥区Ⅳa・Ⅳd層出土遺物



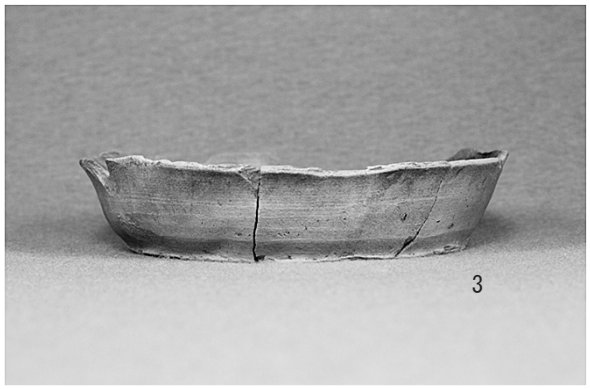

⑥区Ⅳｄ層　出土スクレーパー




⑥区Ⅳァ層　出土石鏃・スクレーパー

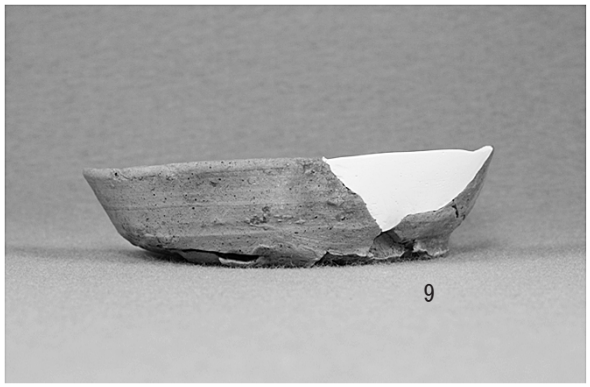



⑥区Ⅳゥ層　出土土器・スクレーパー

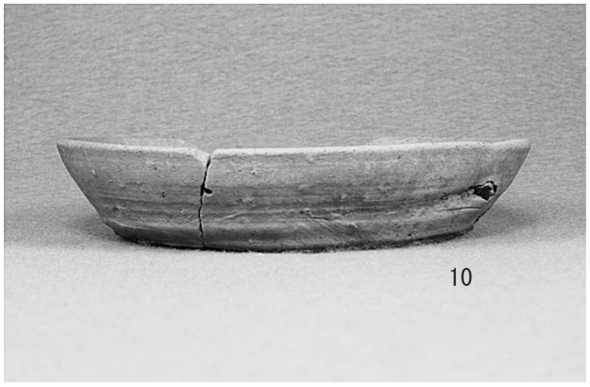



SR-2　出土土師器坏①

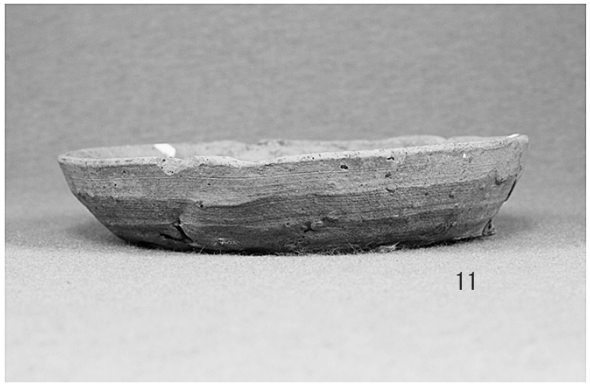
SR-2　出土土師器坏②




SR-2　出土土師器坏③

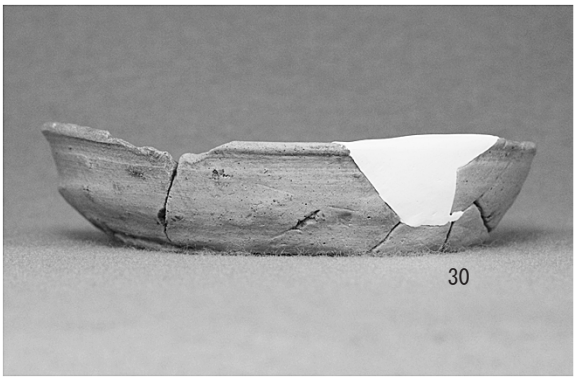



SR-2　出土土師器坏④

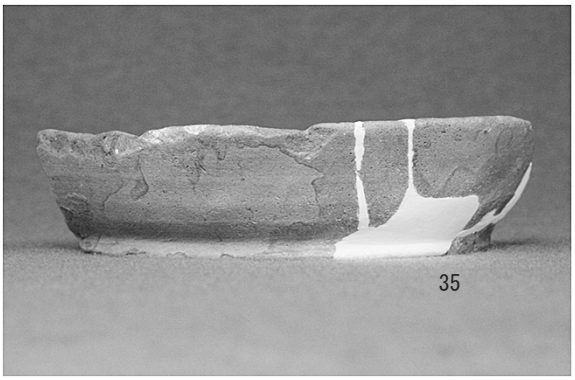



SR-2　出土土師器坏⑤

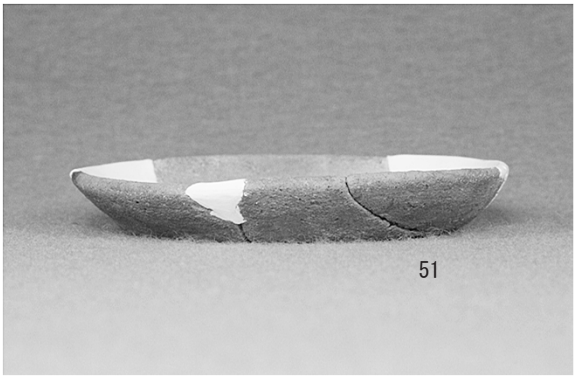
図版8　⑥区Ⅳd・Ⅳァ・Ⅳゥ層・SR-2出土遺物



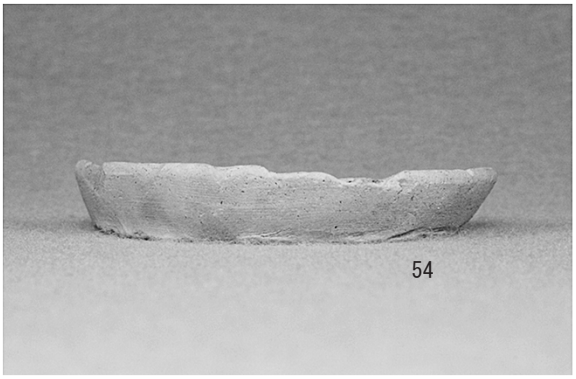

SR-2　出土土師器坏⑥



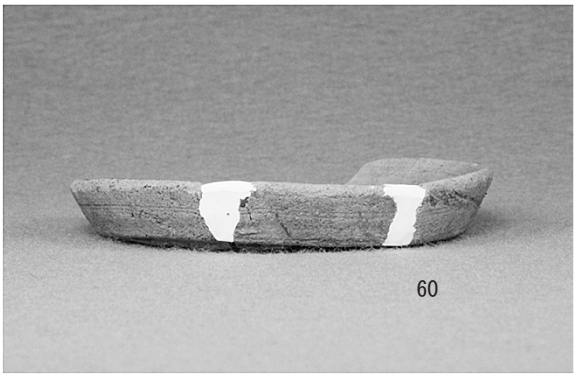

SR-2　出土土師器坏⑦



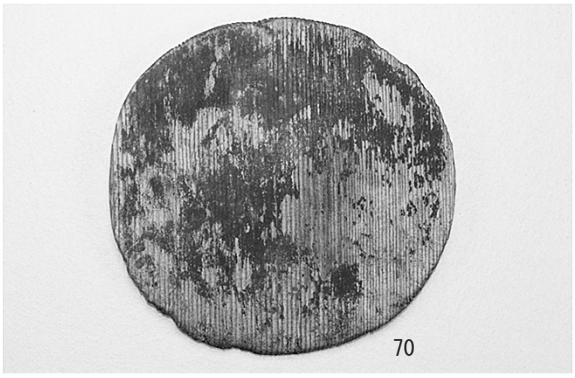

SR-2　出土土師器皿⑧



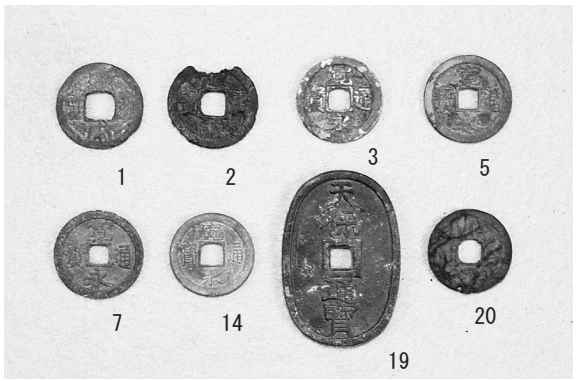

SR-2　出土土師器皿⑨



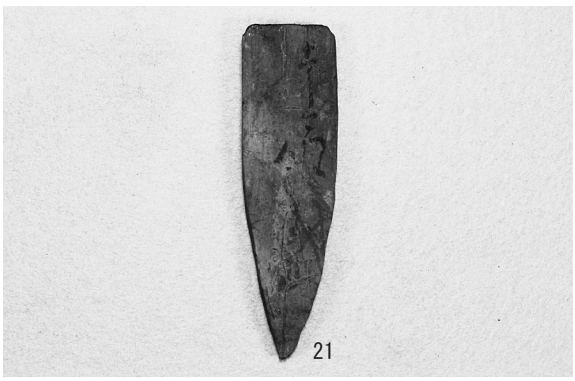

SR-2　出土土師器皿⑩




SR-2　出土木製品⑪




出土銭貨




出土木製品

図版9　SR-2・その他遺物包含層出土遺物

# Ⅶ　附編

## １　縄文時代遺物包含層デジタルデータ編集作業（業務委託）の概要及び所見

国際文化財株式会社　主任研究員　土岐耕司

### １．はじめに

複数年度にわたる今福遺跡発掘調査のうち、平成 22 年度実施②区及び平成 23 年度実施⑥区では「縄文時代遺物包含層」が検出された（本編における「②区縄文時代遺物包含層（Ⅲ層）」、「⑥区縄文時代遺物包含層（Ⅳｂ層）」）。この土層から出土した遺物及びその出土地点座標データを対象とし、総数 6,685 点を数える。

対象となった今福遺跡調査区では、多くの河川跡が検出されている。「縄文時代遺物包含層」は河川礫層上に認められ、更に新しい段階の河川跡によって撹乱欠失している。このため、包含遺物も同様に欠失していることが充分に考えられ、場合によっては層上位から後世の影響を受けている可能性もある。

また、特に⑥区においては、いずれも類似した土壌が折り重なっているものをⅣ層と総称しており、それらを平面的に分層することが俄かには困難であった。そのため、Ⅳ層分布域中央に、南北に走る先行トレンチを設定した（このトレンチは、⑥区全体から見れば東側に位置するため、「東側トレンチ」と呼称している）。このトレンチの壁面土層は 23 層に分層されたが、炭化物が局所的・面的に広がっている、或いはピット上の落ち込み（掘り込み？）が認められる面が、不明瞭ではあるが観察され、この上下でⅣ層を大別できるのではないかと仮定した。

ドット図作成に際しては、上記の通り、「後世遺物の混入具合」「各時期遺物の垂直分布」という視点から新たな知見が得られないか、についても留意した。

調査現場においては、出土地点の座標を測量して遺物を取り上げる際、土器であれば「P」、石器であれば「S」の略号を冠した番号をつけて取り上げた。現場段階で「土器なのか石器なのか」いう以上の細分類は困難であるが、洗浄後の遺物観察によって得られた情報を補足させることにより、「縄文時代遺物包含層」の理解を深めることにつながるものと考えられる。

### ２．作業の方法

土器については、文様・器形・胎土混入物・焼成具合・摩滅程度などの特性・異同を基に、大別・細分を行った。併せて接合作業や同一個体検討を行い、単点相互の関連付けに努めた。

石器については、石材ごと大別した後、同一母岩ごとになるように努め、接合作業を行った。この作業を終えた後、器種ごとに分類し直し、各資料の属性をより細かくした。

そして最終的には、下記のような②区・⑥区共通の分類基準を作成した。土器資料の面で両者を比較すると、⑥区は時期幅が広く、7 倍以上の点数が出土している。これに対し、石器資料を比較すると、②区の方が倍近くの点数となっている。また、②区は黒曜石の割合が非常に高いが、⑥区では安山岩の割合が増える他、②区では出土していない赤色火山岩（仮称）が相当数認められたことが特記される。

**【土器の分類】**

**Ⅰ．坂の下式**

ａ．滑石粒を大量に含むもの
滑石混入による独特の光沢が認められ、ヌルヌルした触感もある。器壁が厚いものは破片が大ぶりで、薄いものは小片であることが多い。凹線で限定された口縁部文様帯に短沈線などで施文されるもの、幅広沈線で縦・横・斜めに施文されるものなどがある。②区では 1 点のみ認められた。

ｂ．大量ではないが滑石粉を含むもの
よく見ると滑石光沢がある、あるいは見た目では光沢が明瞭ではないが、わずかにヌルヌルした触感を感じるもの。色調は黒・茶・赤があり、破砕面はややフレッシュ。文様は指頭押圧文が主で、口唇部も指頭による連続凹圧されることにより緩い鋸歯状を呈する。

ｃ．滑石を含まないもの
外面はオレンジ、内面は灰色のものが多く、黒色の混入物が認められる。器壁はやや厚めで、摩滅により破砕面に丸みを帯びる。文様はⅠｂに同じ。

ｄ．粗砂を含み内面に煤状炭化物が付着するもの
胎土が脆弱なため、接合が困難であり、文様も不明である。しかし、取り上げ番号が最も後の方に固まっていることから、⑥区出土遺物で最も古いものと仮定・推察するものであり、便宜上分類Ⅰの範疇のものとした。当初はほぼ一個体と考えたが、見直しの段階でもう 1 個体発見した。口縁部はほぼ直立し、沈線により水平・斜行文を描く。金雲母をよく含む。

**Ⅱ．鐘崎式前後**

ａ．屈曲部に把手をもつもの、及びそれに類似した胎土のもの。
外面オレンジ～こげ茶で、内面に簡易なミガキを施すもの。スカスカした感じで軽く、摩滅が激しい。特徴的な破片から、鐘崎式前後のものと判断した。胎土・焼成のタイプはいくつかに分かれる。②区で

はやや重量感があり、胎土に白色粒を多く含む。以下のように細分した。

1. 屈曲部に把手をもつもの
   全体として乳橙色を呈し、金雲母をわずかに含む。器壁はやや厚く、焼成は比較的良好。鐘崎式と思われる。
2. 深鉢で屈曲部をもつもの
   器壁は比較的薄く、口径が大きい。

b．内面のミガキが顕著なもの
平口縁のものが認められた。Ⅱ類としては焼成が良好であるため、Ⅲ類に含まれる可能性もあるが、胎土の面でａとも類似する点があるため、この分類とした。②区では１個体が認められた。胴部に屈曲部を持ち、口縁部はわずか外反する。口縁部には２条水平沈線を巡らせる。きれいな土器とは言えないが、焼成は良好である。

c．平口縁で表面の剥落が激しいもの
②区においてはこれが最も多い。口縁部はやや内側に窄まりそうで、口唇面に粗い刻みを施したものもみられる。器壁は厚い。内外面ともにひび割れ・剥落が激しく、触る度にポロポロとこぼれる。⑥区Ⅱａのものの殆どについて、同様の特徴が当てはまるが、うまく区別がつかなかった。

d．砂・角閃石を含むもの
器厚・調整はｂに似るが、砂気が強く、質感が異なる。②区のみ。

e．市来式系統のものか
⑥区にて一個体分が確認されており、接合の結果、台付鉢を想定した。色調は灰白色で、粗雑な作りとなっている。

f．上記以外
②区において分類できなかったもの。

**Ⅲ．太郎迫～三万田式？　※②区では出土・分類していない。**

a．角閃石を含み硬質なもの
器壁は薄く、焼成は堅緻、破片は小さい。口縁部内面に横走条痕を施すものも認められる。口縁部上端を粗雑に折り曲げた平口縁のものが多いが、口唇外端を面取りするもの、内側にくの字に屈曲するもの、外反するものも認められ、太郎迫～三万田式期に帰属するものと考えた。破片が小さいためか点数は多く、プロット図上は大きな一群を形成するものと思われる。

b．角閃石を含まず軟質（粉っぽい）なもの
器壁の厚さ・破片の大きさはａに似るが、特に外面が軟質で摩滅が激しい。資料によっては両者の区別が難しいものもある。外面が灰色、内面が暗灰色の、平底土器である。ほぼ一個体と思われるが、ａ同様点数が多い。

c．器壁が薄く粗砂を含むもの
器壁の厚さ・破片の大きさはａ・ｂに共通する、或いはより薄い。Ⅰｄとは色調・厚さの点で異なる。Ⅲｂから分離する形で細分した。

**Ⅳ．後期末～晩期前半　※②区では出土・分類していない。**

a．精製土器
⑥区で黒色磨研土器の浅鉢口縁部片が数点出土しているが、全て同一個体と思われる。

b．粗製土器
器壁がやや厚く、内外面に条痕を施すものを一括した。色調は様々で、条痕も不明瞭なものもある。⑥区南西で略完形出土した鉢形土器に代表され、点数も多い。全体に焼成が良い。

**Ⅴ．上記以降**

⑥区では板付式期の壷などが散見された。縄文晩期突帯文土器も１点みられたが、上位層からは数点が出土している。これらには角閃石を混入するものもあるため、Ⅲa 土器を論じる上で留意事項である。②区では、土師器も含まれているかもしれない。包含層の撹乱状況を知るには有意な一群である。

**【石器の分類】**

石器については、「石器製作場跡」であるかを検証すること念頭に、以下のように分類した。

**Ⅰ．黒曜石**

a．使用・加工品
　１．石鏃（剥片鏃含む）　　２．その他剥片石器（コアスクレイパー含む）
　３．使用痕のある剥片　　４．磨製石器・敲磨器

b．石核（石核片含める）

c．剥片（原礫・チップを含める）

**Ⅱ．赤色火山岩**　細分類は同じ

**Ⅲ．安山岩（サヌカイト）**　細分類は同じ

**Ⅳ．その他石材**　細分類は同じ

上記の通り、土器資料については、分類ごとに器壁厚さ、破片の大きさ、胎土混入物、焼成具合が異なってい

る。また、煮炊用途による使用頻度（被熱を受けて使い込まれたかどうか）によっても、資料の状態に変化が生じることが考えられる。

傾向としては、滑石を含み器壁の厚いⅠａや、器壁がやや厚く焼成の比較的良好なⅣは、土器の残存状態が良い。反対に、焼成の悪いⅡや砂粒が多く混入されるⅢc、炭化物が多く付着していて相当使い込まれた感のあるⅠｄなどは、接合を試みることはおろか、手にとる度にポロポロと崩れるほど脆弱である。

石器資料の残存状態についてはと言うと、通常の遺跡で出土するものと何も変わらない感じを受け、薄い石刃に観察される微細な剥離痕も明瞭である。

両調査区ともに、河川跡が多数検出されるため、出土資料も二次堆積中のものである可能性が充分にあることは関係者が共通して危惧するところであったが、上記の事象を考えれば、原位置を保った出土資料でないとは一概には言えず、むしろ現場・整理作業ともに従事した筆者は肯定的な感想を抱いた次第である。

両区における出土資料の特徴は、以下の通りである。

**【②区】**

- 土器はその殆どがⅡ類である。従って遺物包含層の時期幅は狭く、出土する石器もこの時期のものであると考えられる。
- Ⅱ類土器は残存状態が悪いため、あまり接合はしなかったものの、同一個体と分かる破片が多く、個体数自体はかなり少ない。
- 石器の点数が、土器に比べて非常に多い。土器 378 点に対し、石器は 2,125 点と約 5.6 倍である。
- 剥片石器の殆どは黒曜石製であり、鈴桶技法による剥片が非常に多く認められる。Ⅱ類土器期の今福の地においては、鈴桶技法が盛行したと言える。

**【⑥区】**

- 土器は、Ⅰ類：703 点、Ⅱ類：554 点、Ⅲ類：477 点、Ⅳ類：402 点と、各期とも相当数の出土をみている。
- 剥片石器は、黒曜石：632 点、赤色火山岩：353 点、安山岩（サヌカイト）：211 点と、3 種類の石材が相当数用いられている。②区の様相から、赤色火山岩に関してはⅡ類期以外の産物である可能性が極めて高く、安山岩についても同様の推察ができる。
- 赤色火山岩はその殆どが剥片・チップであり、使用・加工品の比率が非常に低い。
- 土器 2,848 点に対し、石器 1,205 点の出土である。

**３．遺物に関する気付き**

**【彫器と鈴桶技法】**

鈴桶技法が盛行する②区出土石器を観察した結果、西北九州の縄文遺跡で散見されてきた「彫器」が、地点測量した石器資料からは 22 点が確認された。橘昌信によると、１つの遺跡で確実に彫器とされるものが 20 点を数えることは極めて異例であるとのこと。鈴桶剥片を素材としていると分かるものもあり、剥片端部からの樋状剥離を行い、彫刀面を作出している。この剥離の際の打面は、剥離調整によって作出するものや、折断面をそのまま打面とするものがみられる。清水指導員が認定したもの 22 点、実測に行っているもの 1 点、未認定 12 点であった。②区における他の鈴桶剥片資料を概観すると、以下のことが挙げられる。

- 得られた縦長剥片（石刃）自体に使用痕が認められるものが多い。
- 「つまみ形石器」も出土しているが、剥片片側のみに抉入加工を施しているものも相当量認められた。抉り＝ 折断とは言い難い状況が看取される。
- 両側の抉入加工後に折断されたものも散見されるが、剥片鏃の素材と考えるには幅が狭いものがある。「折断」の目的は幅広いのではないか。
- 残核の中には、「よくぞここまで剥ぎ取った」というべきものが多くみられた。黒曜石産地に近く素材には恵まれているはずの当地において、石材は大切に、そして積極的に使われていることが分かる。

特に②区については、「鈴桶技法が盛行する単一時期の遺跡」と位置づけることができるため、再度鈴桶剥片のピックアップを行った。石器に疎い筆者による選別であるため、後日専門家の目を通す必要を感じるが、傾向としては大過ないものと思われる。折れていたりして、確実に鈴桶剥片とは言えないものもあったため、最小値と最大値を提示する。また、石刃の使用、折断、抉りについても集計した。

ア．②区地点測量石器 2,168 点中、鈴桶剥片 526 点・可能性のあるもの含め 727 点。
イ．⑥区地点測量石器 1,217 点中、鈴桶剥片 7 点・可能性のあるもの含め 14 点。
ウ．②区鈴桶剥片 727 点中、使用痕が認められるもの 111 点
エ．②区鈴桶剥片 727 点中、何らかの形で折れているもの 374 点
オ．②区鈴桶剥片 727 点中、抉り加工が認められるもの 92 点（つまみ形石器含む）
（ウ～オは重複するものが多く、エは意図的なものとそうでないものが混在するものと思われる。）

【赤色火山岩】

⑥区において、赤橙色を呈する剥片・チップが多く出土した。当初これらの石材を「チャート」として処理していたのだが、清水指導員の指摘を受け、詳細は不明であるが火山岩であることが確認された。海綿状の自然面や剥離面にみられる黒斑は、チャートなどの堆積岩ではあり得ない特徴なのだそうである。以降、この石材については「赤色火山岩」と仮称している。

いわゆる「ガジリ痕」などの新しい剥離には光沢が認められるが、それに比べると風化が進んでいるようで、光沢感があまり感じられない。清水指導員はこの石材を「シリカの少ない十勝石」と表現した。十勝石或いは花十勝は、北海道産の黒曜石で、独特の赤色模様が混じることで知られる。

赤色火山岩は、②区では全く出土していないことから、Ⅱ類土器期以外の時期に帰属する可能性が高い。また、他の石材と違って、非常に密集した出土状況を示すこと、チップが非常に多く、地点測量しきれずに一括取り上げしたものも夥量であることから、「石器製作場跡」の傍証となり得る資料と考える。

問題はこの石材はどこで産する何という岩石なのか、ということである。松浦市教委江上氏のご教示で、松浦市宮ノ下り遺跡にて、1 点の花十勝製剥片石器が出土・報告されていることが分かった。果たしてこれらが同一岩石なのか、そうであればその利用は松浦市一帯に限られるのか、追究の必要性があるのではないだろうか。

## ４．ドット図に関する気付き

【②区平面】

・全体として包含層分布域の北西に集中している。数量の多い土器Ⅱc と黒曜石は同じ分布とみてよい。
・土器Ⅴは遺物密度の低い南東側に散在している。北西の集中部への後世の影響は少ないことが考えられる。
・石核は広く全体に散在している。

【⑥区平面】

・土器Ⅰa とⅠb の分布域はほぼ重なる。両者は滑石混入程度の違いであるため、この傾向は想定通りである。全体として北・南にいくほど高密度である。
・土器Ⅰc は南側やや集中しているようにみえるが、これらは同一個体である。
・土器Ⅰd は中央東側に集中している。これも同一個体である。但し他のⅠ類とは重なりが感じられない。
・土器Ⅱa は、全分類中最も偏在なく分布している。
・土器Ⅱb・Ⅲb・Ⅲc はやや北側に偏在する。後 2 者はより類似した分布を示す。
・土器Ⅲa は、北と南にそれぞれ局所的に分布する。
・土器Ⅳは包含層分布域全体に散在する。北側に密集が認められるが、これらは同一個体と思われる。
・黒曜石は、石鏃に北側への偏在が認められる他は、包含層分布域全体に分布している。
・赤色火山岩は中央・北側への密集が認められる。北側の密集箇所は土器Ⅳb2 と最も分布域が重なってみえる。

【⑥区断面】

・東側トレンチ 10 層上半に遺物が帯状に出土している。これとは別に、北側では 13～18 層にて遺物が多く出土しているようである。
・赤色火山岩と垂直分布が重なるのは黒曜石が多い。点数が少ないため、土器との重なりは明確ではないが、Ⅰd・Ⅲc が比較的近い。確実に坂の下式と言えるⅠa～c や、鐘崎式を比定しているⅡa とは、分布域が殆ど重ならない。
・安山岩は、特に北側にて低レベルに分布している。この傾向はⅠa～c と似ている。
・Ⅲa は他のⅢ類に比べて高レベルで出土する傾向がある。
・Ⅳの中には比較的低レベルで出土しているものがみられる。特にⅣb はあまり特徴のない粗製土器であり、細片による分類が困難であったこともあるため、仕分けミスの結果である可能性が高い。

## ５．まとめ

これらのことを鑑み、以下の可能性及び問題点を提示する。

・②区Ⅲ層は、土器Ⅱc 期の単一包含層であり、鈴桶技法が盛行した時期でもある。彫器が 20 点以上出土したことは、非常に注目される。
・⑥区では下層低レベルから土器Ⅰ類が出土する傾向があり、他の土器との新古関係とは矛盾しない。共伴する石器は安山岩の比率が若干高いことが考えられる。
・⑥区土器Ⅰd は、坂の下式の範疇に入ると想定し分類したが、そうでない可能性がある。胎土混入物から考えてⅢc と同じか。炭化物が付着するものがあるので、年代測定することも有意なことかと思われる。
・両区の鈴桶剥片点数に大きな開きがあることから、⑥区土器Ⅱ類は、②区土器Ⅱ類とは別物である可能性もある。或いは堆積の違いを検討すべきかもしれない。
・⑥区の赤色安山岩は、土器Ⅲ期以降の産物である可能性が高い。

## ２　今福遺跡における彫器について

国際文化財株式会社　調査員　鵜久森彬

### １.はじめに

本遺跡において、縄文後晩期の彫器が 32 点出土している。製品の中では、剥片鏃の 33 点に次ぐ数量であり、本遺跡の石器群の中で重要な要素となっている。本遺跡出土の彫器は、②区Ⅲ層（本編における「②区縄文時代遺物包含層(Ⅲ層)」）から 31 点(縄文後期中葉)と⑥区Ⅳ層（本編における「⑥区縄文時代遺物包含層(Ⅳｂ層)」）から 1 点(縄文後期前葉～晩期)出土しており、共伴する土器型式から縄文後晩期に属するものと思われる。また、周辺遺跡において、一遺跡内で 30 点を越す彫器を出土する遺跡が存在しないことから、本遺跡出土彫器が極めて特殊であること分かる。したがって、本稿では、本遺出土彫器の形態的特徴と組成、周辺遺跡出土彫器との比較分析を通して、縄文後晩期の彫器について概観し、松浦市域における縄文後晩期の石器生産の一端を明らかにしたい。なお，本稿の本文・表で使用した②区Ⅲ層の遺物は同層出土品の内ドット取り上げ分である。

### ２.研究略史

縄文時代における彫器の研究としては、橘昌信による先駆的な研究がある(橘 1982)。西北九州の縄文時代の彫器に対し技術形態学的視点から、後期旧石器時代の彫器と同様であるものが存在するとしながらも、系統的には不明であるとしている。また、資料数では縄文後晩期が圧倒的に多く、素材剥片の大半が黒曜石の縦長剥片を用いている点から、縦長剥片石器文化の石器群の一要素として位置づけている。

縄文時代における彫器の機能的研究はみられないが、近年、後期旧石器時代の彫器の機能について使用痕分析から興味深い結果が得られている(岩瀬 2012)。それは、杉久保石器群に伴う彫器(神山型彫器)と荒屋型彫器という 2 つの時間差をもつ彫器から、それぞれ異なる使用傾向が認められるという結果である。したがって、当該期の彫器についても、どのような傾向がみられるか今後の分析が期待される。

### ３.形態的特徴

#### a.分類

橘によって、彫刀面が作出される位置と彫刀面を設ける際の打面の状態から五類に大別されている。ここでは、橘分類を準用して分析を行いたい。

Ⅰ類：平坦な面を打面として、その一端から樋状剥離を施しているもの。
Ⅱ類：彫刀面を設けるための平坦な打面をもっておらず、彫刀面が素材の一部を斜めに横切っているもの。
Ⅲ類：彫刀面を設けるための打面に調整の剥離が施されているもの。
Ⅳ類：樋状剥離の打面形成が、樋状剥離面と反対の方向からの樋状剥離によって準備されているもの。
Ⅴ類：彫刀面が主要剥離面側に大きくねじれているもの。

本遺跡における彫器は、Ⅰ類:②区 6 点、Ⅱ類：②区 1 点、Ⅲ類：②区 15 点、Ⅳ類：②区 5 点、Ⅴ類：②区 1 点、⑥区 1 点、Ⅰ類＋Ⅲ類：②区 2 点、Ⅲ類＋Ⅳ類：②区 1 点に分類できる(表 1)。特徴としては、Ⅲ類が半数を占めること、Ⅰ類＋Ⅲ類、Ⅲ類＋Ⅳ類といった、異なる類型同士が複合するものが認められた。

#### b.大きさと素材の選択傾向

次に各類型と大きさの関係について分析を行った(図 1)。長さ 50㎜ 前後、幅 20㎜ 前後に集中する傾向が認められる。これらの大半は、鈴桶型石刃を素材としている。また、Ⅲ類、Ⅳ類、Ⅴ類には、長さ 50㎜ 以上のものが認められ、鈴桶型石刃を素材としている。したがって、彫器と鈴桶技法との間には深い関係があることが理解できる。また、大きさについては、長さ 50㎜ 以上の彫器には、少なくともそれ以上の大きさの素材剥片を用いていることが考えられる。本遺跡出土の鈴桶型石刃石核の作業面の長さは 31～49㎜ であること(1)、長さ 50㎜ 以上の彫器はいずれも鈴桶型石刃素材であることから、原産地遺跡である佐賀県伊万里市鈴桶遺跡と消費地である本遺跡との流通関係、あるいは、時期差が関係しているものと思われる(2)。

### ４.組成

#### a.石器組成

本遺跡における石器組成は次の通りである(表 2)。②区Ⅲ層では彫器をはじめ、剥片鏃、つまみ形石器といった、鈴桶技法関連の石器が一定量認められ、さらに、②区Ⅲ層の石核の中には鈴桶型石刃石核が認められる。⑥区Ⅳ層では、彫器、剥片鏃、つまみ形石器が殆ど無い。両調査区共に一定量認められる、二次加工剥片、使用痕剥片、剥片についても、鈴桶型石刃の比率をみると②区に偏る傾向が認められる(表 3･4)。

#### b.石材別の石器組成

本遺跡における石材別の石器組成は次の通りである(表 5)。②区Ⅲ層で定形的な石器が全て黒曜石製、不定形な石器の大半を黒曜石製が占め、一部安山岩が混じる。⑥区Ⅳ層では、定形的な石器、不定形な石器共に黒曜石製が大半を占めながら、安山岩、赤色火山岩(3)が混じる。この両調査区の石材利用傾向の違いは、先述した鈴桶技法関連の比率の違いと深く関係し、鈴桶技法の盛衰という時期差を示している可能性が考えられる。しかしながら、②区Ⅲ層は

共伴する土器から縄文時代後期中葉として位置付けることが出来るが、⑥区Ⅳ層は縄文時代後期前葉から縄文時代晩期までの土器が出土していることから、時期を限定することが出来ない。

## ５.松浦市域における彫器

ここでは、周辺遺跡出土彫器を概観し、本遺跡出土彫器と比較していきたい。

後期旧石器時代の彫器と縄文時代の彫器の系統性が不明であることから、時代を問わず彫器[4]として報告されているもの全てを集成した(図 2～4･表 6)。

松浦市域における彫器は、9 遺跡(今福･辻ノ尾･宮ノ下リ･明賀谷･中野･田川･田原･下田･下谷)57 点(今福:32 点･辻ノ尾:1 点･宮ノ下リ:4 点･明賀谷:2 点･中野 4 点･田川:3 点･田原:1 点･下田:1 点･下谷:9 点) [5]を数える。

彫器として報告されているものの大半は、後世の遺物と混在して出土しているものか、或いは表採したものであることから、所属する時期はある程度の時間幅の中で考慮する必要がある。一方で、時期が概ね限定されるものは、本遺跡の 32 点と下谷遺跡の 9 点で、いずれも縄文時代後晩期に属するものである。

その両遺跡には共通点を見出すことができる。本遺跡②区と下谷遺跡(図 4-17～22)からは、縄文時代後期の彫器と伴に剥片鏃、つまみ形石器、鈴桶型石刃、鈴桶型石刃石核が出土している点である。技術形態的にも鈴桶型石刃を素材とし、彫刀面を側縁に沿って設けているものが大半であることも共通している。その他の遺跡から出土した彫器については、時期が限定できない為、鈴桶型石刃を素材としたものかは定かではないが、黒曜石製の縦長の剥片を素材とし 、彫刀面を側縁に沿って設けているものが殆どであることから、技術形態的には類似している。

本遺跡とその他の遺跡との相違点については、本遺跡の彫器 32 点に対し、その他の遺跡では 9 点以下である点。また、本遺跡では黒曜石製の彫器のみだが、下谷遺跡では安山岩製の彫器が認められる点で異なる。

## ６.まとめ

本稿では、本遺跡出土彫器の形態的特徴と組成、周辺遺跡出土彫器との比較分析を通して、縄文時代後期の彫器についての特徴を見出すことができた。最後に、本遺跡出土彫器を中心として松浦市域における縄文後晩期の石器生産の課題について言及し、まとめとしたい。

本遺跡出土彫器は、Ⅰ～Ⅴ類まで認められ、その中でもⅢ類が半数を占める。また、Ⅰ類＋Ⅲ類、Ⅲ類＋Ⅳ類といった、異なる類型同士が複合するものも認められる。

本遺跡出土彫器の大きさは、長さ 50㎜前後、幅 20㎜前後が中心であり、鈴桶型石刃が用いられていることが殆どである。長さ 50㎜ 以上の彫器は、全て鈴桶型石刃素材であることから、原産地遺跡である佐賀県伊万里市鈴桶遺跡と消費地である本遺跡との流通関係、或いは、時期差を示しているものと思われる。

本遺跡②区Ⅲ層と⑥区Ⅳ層の組成の比較からは、両調査区の鈴桶技法関連石器の比率と石材利用傾向の違いが、鈴桶技法の盛衰という時期差を示している可能性が考えられ、彫器もその影響を十分に受けているものと思われる。

周辺遺跡出土彫器との比較から、本遺跡②区Ⅲ層出土彫器は、縄文時代後期中葉に限定できる好資料であることが言える。また、一遺跡から彫器 32 点が出土していることは極めて異例である。松浦市域を離れ福岡県春日市に所在する柏田遺跡から縄文時代後期中葉の彫器 20 点が出土していることは知られているが、本遺跡では柏田遺跡を上回ったことからも異例であることが理解できる。

縄文時代後期中葉に属する本遺跡②区Ⅲ層出土彫器は、剥片鏃、つまみ形石器、鈴桶型石刃、鈴桶型石刃石核と伴に出土している。彫器の中には鈴桶型石刃を素材とし、彫刀面を側縁に沿って設けている(Ⅰ･Ⅲ類)ものが認められる。縄文時代後期に属する下谷遺跡出土彫器(図 4-17～22)と特徴が共通していることからも、鈴桶技法と深く関係していると言えよう。

一方で、所属時期が判然としない彫器については、技術形態的に類似している彫器が系統性を示すものか、縄文時代後期の彫器であることを示すものなのかは不明と言わざるを得ない。また、安山岩製の彫器が時期差を示すものかについても不明である。縄文時代晩期の彫器についても分析に耐え得るだけの資料数がなく、特徴を見出すまでには至らなかった。今後、地域を広げて分析することと共に、発掘調査による資料数の増加が望まれる。

今回、縄文時代後晩期の彫器の機能については言及できなかったが、本稿で集成した彫器の中には使用痕が認められるものがあった。今後、分析を通して当該期の彫器の機能が明らかになるものと思われる。


## 謝辞

本稿の執筆にあたり、別府大学非常勤講師･清水宗昭先生に有益な教示を賜りました。長崎県教育庁･杉原敦史氏には本稿掲載の機会を賜りました。松浦市教育委員会･江上正高氏には松浦市内出土彫器の計測とその成果の公表に関する便宜を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。


## 注

(1) 石核は、剥片剥離の進行により、本来の作業面の長さよりも短くなっている可能性があり、長さ 50 ㎜を超える石刃については、剥片剥離作業初期段階のものと考えることもできる。しかし、石核及び石刃の観察から打面再生がみられないこと、剥片剥離作業が打面を固定して上下から行われていることから、剥片剥離作業初期段階においても概ね長さ 50 ㎜であったと推測される。

(2) 橘によると、多量の縦長剥片を出土している鈴桶遺跡では長さ 5～8㎝、柏田遺跡では長さ 4～5㎝ 前後の値が求められるようである(橘 1978)。これは、原産地から離れると石刃の大きさが小さくなることを示すものである。一方、時期差については、小南により、縄文時代後期の石刃には 6㎝ を超えるものがあるが、縄文時代晩期では

6cm を超えるものが無くなるということが指摘されている(小南 2006)。
(3) 正式な岩石名と産地が不明であることから、赤色火山岩(仮称)としている。今後、岩石鑑定が望まれる。
(4) 彫刻刀形石器とされているものも含む。
(5) 下谷遺跡 3 号貯蔵穴出土彫器については文章のみの報告であり、計測値等は不明である。

**引用･参考文献**


岩瀬　彬 2012「最終氷期最盛期の本州東半部日本海側地域における石器使用の特徴-杉久保石器群に伴う彫器の使用痕分析-」『旧石器研究』8　日本旧石器学会
神川めぐみ 2008「九州の縄文時代後晩期における石刃流通:鈴桶型石刃技法について」熊本大学社会文化研究 6
小南裕一 2006「鈴桶技法の終焉-九州北半地域を中心として-」『陶塤』19　山口県埋蔵文化財センター
下川達彌 1984「長崎県松浦市域における旧石器時代遺跡」『長崎県北松浦地方の文化』長崎県立美術博物館
橘　昌信 1978「剥片石器-西北九州における縄文時代の石器研究(1)-」『史学論叢』9 別府大学史学研究会
橘　昌信 1982「彫器-西北九州における縄文時代の石器研究(5)-」『史学論叢』13 別府大学史学研究会
中田敦之 1987「下田遺跡」松浦市文化財調査報告書第 3 集　松浦市教育委員会
中田敦之 1989「宮ノ下り遺跡」松浦市文化財調査報告書第 5 集　松浦市教育委員会
中田敦之 1991「田原遺跡」松浦市文化財調査報告書第 10 集　松浦市教育委員会
中田敦之･高原愛 1997「田川遺跡」松浦市文化財調査報告書第 12 集　松浦市教育委員会
中田敦之･明石拡子 2002「下谷遺跡」松浦市文化財調査報告書第 18 集　松浦市教育委員会
萩原博文 1971「長崎県松浦市周辺の先土器文化」『考古学ジャーナル』59　ニューサイエンス社

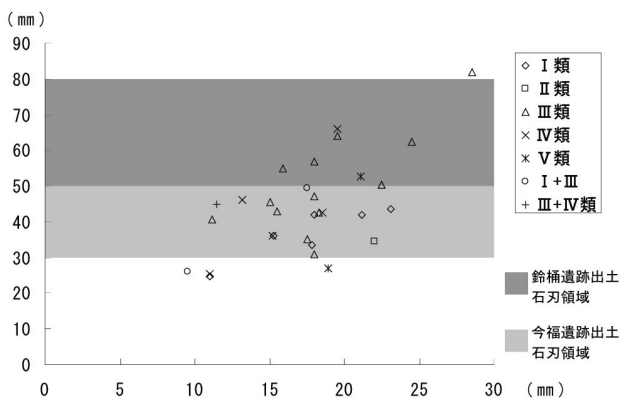




図１　今福遺跡出土彫器長幅比

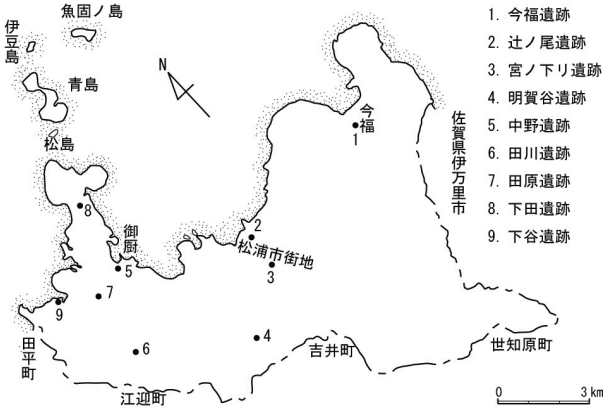
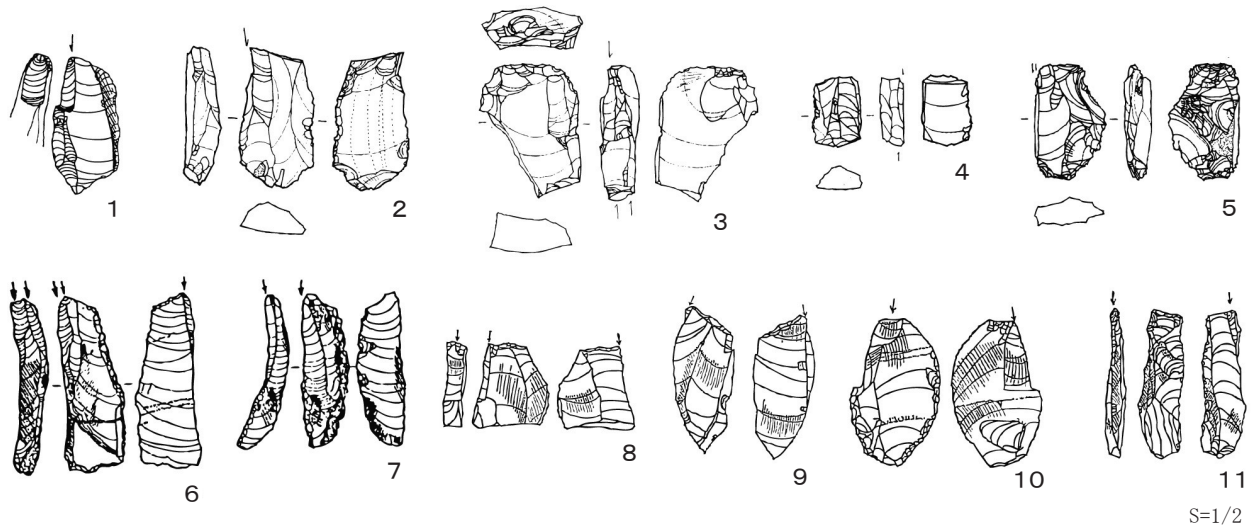



図２　松浦市域の彫器出土遺跡分布図




S=1/2

図３　周辺遺跡出土彫器①

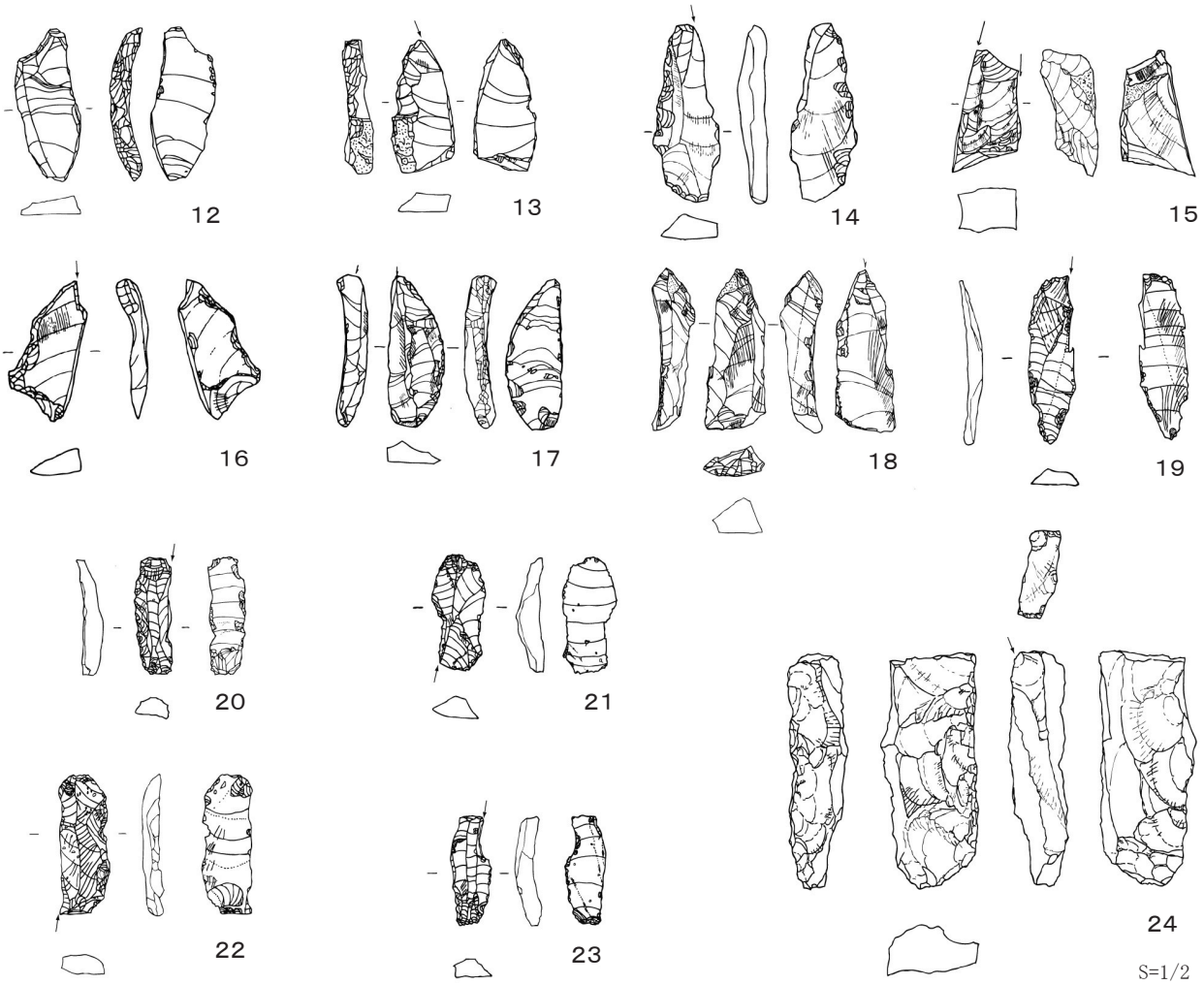



図４　周辺遺跡出土彫器②

表1　今福遺跡出土彫器

| 実測番号 | 遺跡名 | 出土層位 | 時期 | 類型 | 石材 | 長さ(㎜) | 幅(㎜) | 厚さ(㎜) | 重さ(g) | 素材 | 備考 | 剥片鏃 | つまみ | 石刃 | 石核 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 402 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅰ | 黒曜石 | 24.6 | 11.0 | 5.0 | 1.27 | － | 削片の可能性あり | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 403 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅰ | 黒曜石 | 33.4 | 17.8 | 7.5 | 3.51 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 405 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅰ | 黒曜石 | 36.0 | 15.3 | 8.0 | 4.33 | － | 使用痕あり。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 407 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅰ | 黒曜石 | 43.5 | 23.1 | 8.0 | 7.81 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 412 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅰ | 黒曜石 | 42.0 | 18.0 | 4.0 | 2.96 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 413 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅰ | 黒曜石 | 42.0 | 21.2 | 4.5 | 2.81 | 鈴桶 | 使用痕あり。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 411 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅰ＋Ⅲ | 黒曜石 | 49.5 | 17.5 | 11.0 | 7.35 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 420 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅰ＋Ⅲ | 黒曜石 | 26.0 | 9.5 | 5.0 | 1.38 | － | 削片素材か？ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 419 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅱ | 黒曜石 | 34.5 | 22.0 | 5.0 | 3.45 | － | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 295 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 82.0 | 28.5 | 10.5 | 12.83 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 404 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 43.0 | 15.5 | 7.0 | 3.29 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 406 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 62.5 | 24.5 | 13.5 | 12.86 | 鈴桶 | 使用痕あり。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 408 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 45.5 | 15.0 | 5.5 | 3.53 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 410 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 42.7 | 18.3 | 7.5 | 4.10 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 414 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 57.0 | 18.0 | 8.5 | 5.51 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 415 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 55.0 | 15.9 | 8.5 | 4.82 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 417 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 35.0 | 17.5 | 5.5 | 1.86 | 鈴桶 | 使用痕あり。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 418 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 61.0 | 20.5 | 9.5 | 14.56 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 422 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 39.0 | 23.1 | 6.5 | 5.24 | － | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 423 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 40.5 | 11.2 | 5.6 | 1.73 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 424 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 47.0 | 18.0 | 7.0 | 3.56 | 鈴桶 | 使用痕あり。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 425 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 64.0 | 19.5 | 9.0 | 7.51 | 鈴桶 | 使用痕あり。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 426 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 50.5 | 22.5 | 10.0 | 6.39 | 鈴桶 | 使用痕あり。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 427 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 31.0 | 18.0 | 6.0 | 2.84 | － | 使用痕あり。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 416 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅲ＋Ⅳ | 黒曜石 | 45.0 | 11.5 | 9.0 | 4.59 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 401 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅳ | 黒曜石 | 46.0 | 13.2 | 7.5 | 2.59 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 409 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅳ | 黒曜石 | 36.0 | 15.2 | 7.0 | 1.83 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 421 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅳ | 黒曜石 | 42.5 | 18.5 | 5.5 | 3.29 | 鈴桶 | 使用痕あり。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 428 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅳ | 黒曜石 | 25.5 | 11.0 | 8.0 | 2.24 | － | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 430 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅳ | 黒曜石 | 66.0 | 19.5 | 15.0 | 8.09 | 鈴桶 | 使用痕あり。 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 285 | 今福遺跡②区 | Ⅳ層 | 縄文後期前葉～晩期 | Ⅴ | 黒曜石 | 52.5 | 21.1 | 8.0 | 8.89 | 鈴桶 | | ○ | | ○ | |
| 429 | 今福遺跡②区 | Ⅲ層 | 縄文後期中葉 | Ⅴ | 黒曜石 | 27.0 | 18.9 | 5.5 | 2.31 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |

## 表2　石器組成

| 調査区 | 石鏃 | 剥片鏃 | 尖頭器？ | 石錐 | 石匙 | つまみ | 彫器 | ｽｸﾚｰﾊﾟｰ | RF | UF | 剥片 | チップ | 石核 | 石核片 | 原礫 | 磨石類 | 打斧 | 磨斧 | 石皿？ | 砥石 | その他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ②区Ⅲ層 | 8 | 32 | | | | 26 | 31 | 29 | 238 | 166 | 1489 | 57 | 34 | 15 | 2 | 2 | | | 1 | | | 2130 |
| ⑥区Ⅳ層 | 14 | 1 | 9 | 2 | 4 | | 1 | 64 | 90 | 39 | 843 | 77 | 36 | 10 | 5 | | 4 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1205 |
| 合計 | 22 | 33 | 9 | 2 | 4 | 26 | 32 | 93 | 328 | 205 | 2332 | 134 | 70 | 25 | 7 | 2 | 4 | 2 | 2 | 1 | 2 | 3335 |

## 表3　②区Ⅲ層における鈴桶型石刃の割合

| 彫器 | | スクレーパー | | RF | | UF | | 剥片 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 鈴桶 | 非鈴桶 | 鈴桶 | 非鈴桶 | 鈴桶 | 非鈴桶 | 鈴桶 | 非鈴桶 | 鈴桶 | 非鈴桶 |
| 24 | 7 | 9 | 20 | 137 | 101 | 111 | 55 | 421 | 1068 |
| 77.4% | 22.6% | 31.0% | 69.0% | 57.6% | 42.4% | 66.9% | 33.1% | 28.3% | 71.7% |

## 表4　⑥区Ⅳ層における鈴桶型石刃の割合

| 彫器 | | RF | | UF | | 剥片 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 鈴桶 | 非鈴桶 | 鈴桶 | 非鈴桶 | 鈴桶 | 非鈴桶 | 鈴桶 | 非鈴桶 |
| 1 | 0 | 4 | 86 | 4 | 35 | 6 | 837 |
| 100.0% | 0.0% | 4.4% | 95.6% | 10.3% | 89.7% | 0.7% | 99.3% |

## 表5　石材別石器組成

| ②区Ⅲ層 | 石鏃 | 剥片鏃 | 尖頭器？ | 石錐 | 石匙 | つまみ | 彫器 | ｽｸﾚｰﾊﾟｰ | RF | UF | 剥片 | チップ | 石核 | 石核片 | 原礫 | 磨石類 | 打斧 | 磨斧 | 石皿？ | 砥石 | その他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 黒曜石 | 8 | 32 | | | | 26 | 31 | 23 | 234 | 165 | 1421 | 56 | 33 | 15 | 2 | | | | | | | 2046 |
| 安山岩 | | | | | | | | 6 | 4 | 1 | 68 | | 1 | | | | | | | | | 80 |
| 結晶片岩 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 砂岩 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| 不明 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | 2 |
| 合計 | 8 | 32 | | | | 26 | 31 | 29 | 238 | 166 | 1489 | 57 | 34 | 15 | 2 | 2 | | | 1 | | | 2130 |

| ⑥区Ⅳ層 | 石鏃 | 剥片鏃 | 尖頭器？ | 石錐 | 石匙 | つまみ | 彫器 | ｽｸﾚｰﾊﾟｰ | RF | UF | 剥片 | チップ | 石核 | 石核片 | 原礫 | 磨石類 | 打斧 | 磨斧 | 石皿？ | 砥石 | その他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 黒曜石 | 14 | 1 | 6 | 1 | 2 | | 1 | 33 | 70 | 33 | 430 | 2 | 27 | 7 | 5 | | | | | | | 632 |
| 安山岩 | | | 3 | | 2 | | | 31 | 12 | 3 | 149 | | 7 | 2 | | | 2 | | 1 | | | 212 |
| 赤色火山岩 | | | | 1 | | | | | 8 | 3 | 264 | 75 | 2 | | | | | | | | | 353 |
| 玄武岩 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| 蛇紋岩 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| 砂岩 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | 1 |
| 不明 | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | 2 | 1 | | | | 4 |
| 合計 | 14 | 1 | 9 | 2 | 4 | | 1 | 64 | 90 | 39 | 843 | 77 | 36 | 10 | 5 | | 4 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1205 |

## 表6　松浦市域における彫器

| 番号 | 遺跡名 | 出土層位 | 時期 | 類型 | 石材 | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 重さmm | 素材 | 備考 | 剥片鏃 | つまみ | 石刃 | 石核 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 辻ノ尾遺跡 | 表採 | 旧石器～縄文 | Ⅰ | 黒曜石 | 36.4 | 17.9 | － | － | | 中世までの遺物が混在 | | | | |
| 2 | 宮ノ下リ遺跡 | 2～4層 | 旧石器～縄文 | Ⅰ | 黒曜石 | 37.3 | 19.4 | 7.6 | 5 | | 中世までの遺物が混在 | ○ | | | |
| 3 | 宮ノ下リ遺跡 | 2～4層 | 旧石器～縄文 | Ⅰ | 黒曜石 | 34.8 | 24.9 | 9.9 | 10 | | 中世までの遺物が混在 | ○ | | | |
| 4 | 宮ノ下リ遺跡 | 不明 | 旧石器～縄文 | Ⅰ | 黒曜石 | 18.4 | 12.6 | 6.2 | 2 | | 中世までの遺物が混在 | | | | |
| 5 | 宮ノ下リ遺跡 | 不明 | 旧石器～縄文 | Ⅲ | 黒曜石 | 31.4 | 19.0 | 6.5 | 4 | | 中世までの遺物が混在 | | | | |
| 6 | 明賀谷遺跡 | 表採 | 旧石器～縄文 | Ⅲ | 黒曜石 | 46.4 | 15.9 | 7.7 | － | | | | | | |
| 7 | 明賀谷遺跡 | 表採 | 旧石器～縄文 | Ⅰ | 黒曜石 | 40.6 | 12.0 | 7.5 | － | | | | | | |
| 8 | 中野遺跡 | 表採 | 旧石器～縄文 | Ⅲ | 黒曜石 | 22.2 | 19.5 | 0.5 | － | | | | | | |
| 9 | 中野遺跡 | 表採 | 旧石器～縄文 | Ⅲ | 黒曜石 | 38.2 | 16.0 | － | － | | | | | | |
| 10 | 中野遺跡 | 表採 | 旧石器～縄文 | Ⅴ | 黒曜石 | 38.8 | 23.5 | － | － | | | | | | |
| 11 | 中野遺跡 | 表採 | 旧石器～縄文 | Ⅲ | 黒曜石 | 30.0 | 11.0 | 4.7 | － | | | | | | |
| 12 | 田川遺跡 | 不明 | 縄文 | ？ | 黒曜石 | 41.9 | 16.1 | 5.5 | 5 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 13 | 田川遺跡 | 不明 | 縄文 | Ⅱ | 黒曜石 | 35.8 | 17.4 | 7.4 | 6 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 14 | 田川遺跡 | 不明 | 縄文 | Ⅱ | 黒曜石 | 49.5 | 18.9 | 6.4 | 6 | 鈴桶 | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 15 | 田原遺跡 | Ⅱ～Ⅳ層 | 旧石器～縄文 | Ⅰ | 黒曜石 | 37.7 | 17.5 | 13.8 | 9.4 | | 近世までの遺物が混在 | ○ | | | |
| 16 | 下田遺跡 | 表土 | 旧石器～縄文 | Ⅱ | 黒曜石 | 38.5 | 22.1 | 5.5 | 2.2 | | | | | | |
| 17 | 下谷遺跡 | Ⅳ層 | 縄文後期前葉～後葉 | Ⅳ | 黒曜石 | 42.5 | 15.5 | 8.5 | 5.2 | 鈴桶 | 近世までの遺物が混在 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 18 | 下谷遺跡 | Ⅲ層 | 縄文後期前葉～後葉 | Ⅳ | 黒曜石 | 45.5 | 17.0 | 12.0 | 7.5 | 鈴桶 | 近世までの遺物が混在 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 19 | 下谷遺跡 | Ⅱ～Ⅶ層 | 縄文後期前葉～後葉 | Ⅲ | 黒曜石 | 45.6 | 13.1 | 3.3 | 2.23 | 鈴桶 | 近世までの遺物が混在 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 20 | 下谷遺跡 | Ⅱ～Ⅶ層 | 縄文後期前葉～後葉 | Ⅰ | 黒曜石 | 32.0 | 10.4 | 5.7 | 2.27 | 鈴桶 | 近世までの遺物が混在 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 21 | 下谷遺跡 | Ⅱ～Ⅶ層 | 縄文後期前葉～後葉 | Ⅰ | 黒曜石 | 32.0 | 15.0 | 5.1 | 2.3 | 鈴桶 | 近世までの遺物が混在 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 22 | 下谷遺跡 | Ⅱ～Ⅶ層 | 縄文後期前葉～後葉 | Ⅰ | 黒曜石 | 38.5 | 13.8 | 5.0 | 3.47 | 鈴桶 | 近世までの遺物が混在 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 23 | 下谷遺跡 | 表採 | 縄文後晩期？ | Ⅲ | 黒曜石 | 30.8 | 11.4 | 5.0 | 2.1 | 鈴桶 | | | | | |
| 24 | 下谷遺跡 | 表採 | 縄文後晩期？ | Ⅰ | 安山岩 | 65.1 | 27.2 | 14.4 | 35.6 | | | | | | |

※1・6～11については、実測図より計測

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | いまふくいせき |
| 書　　名 | 今福遺跡 |
| 副 書 名 | 一般国道497号伊万里松浦道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻　　次 | Ⅲ |
| シ リ ー ズ名 | 長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第８集 |
| 編 著 者 名 | 生田次男・杉原敦史・福永祐馬・加世田尊・竹本成美・冨岡藤満 |
| 編 集 機 関 | 長崎県教育委員会 |
| 所 在 地 | 〒850-8570　長崎県長崎市江戸町２番13号　TEL095-824-1111 |
| 発 行 年 月 | 西暦2013年 3月 |

| 収録遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | ° ′ ″ | ° ′ ″ | | ㎡ | |
| 今福遺跡（いまふくいせき） | 長崎県（ながさきけん）<br>松浦市（まつうらし）<br>今福町（いまふくちょう） | 42208 | 101 | 33°<br>21′<br>00″ | 129°<br>45′<br>50″ | 20091016～<br>20100316<br>20100518～<br>20110316<br>20110615～<br>20120220 | 1,800<br><br>10,300<br><br>6,600 | 道路建設 |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 今福遺跡 | 旧河道跡・<br>遺物包蔵地 | ・縄文<br>・弥生<br>・古墳<br>・古代<br>・中世<br>・近世 | ・旧河道跡30条<br>・縄文後期の<br>遺物包含層<br>・縄文後期～<br>弥生前期の<br>遺物包含層 | ・縄文土器<br>・弥生土器<br>・土師器<br>・須恵器<br>・黒色土器<br>・瓦器<br>・貿易陶磁器<br>・陶磁器<br>・滑石製石鍋<br>・各時代の石器，<br>石製品，<br>木製品，<br>金属製品 | 特になし |

長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第８集
一般国道497号伊万里松浦道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅲ
今　福　遺　跡
平成25(2013)年3月発行
発行者　長崎県教育委員会
〒850-8570　長崎市江戸町２番13号
☎０９５－８２４－１１１１
印刷所　有限会社 立山印刷
長崎県佐世保市瀬戸越4-1413-19
☎０９５６－４０－９１５１